夕焼け通信 1383号　2023.1.16
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２)129

木幡智恵美

迫りくるコロナ（4）

心配は的中。新学期が始まった週の水曜日の夜、娘から連絡が入った。保育園の関係者が感染し、今週いっぱい園はお休みとのことだ。「明日、明後日休みを取ったけど、宗矢がいると、買い物も出来んけん、明後日来てくれん」と言うので金曜日に玉湯へ。玄関では宗矢が迎えてくれた。靴を脱いで上がると、「あなあいちょうよ」と宗矢。見ると、確かに靴下の踵の横に直径五ミリほどの穴が空いていた。

しばらく家の中で遊び、雨が上がるのを待って、実歩、宗矢を連れて娘と四人で散歩に出る。寛大の通学路を歩き、旧小学校横から神社を回って山道を下る途中、山肌に白いものが見えた。近づくと、ギンリョウソウだ。図鑑では腐植土の上に生える腐生植物との説明があり、不潔で不気味なイメージだったが、実際に目にすると、透き通ったタツノオトシゴのようなその姿は、神社の近くにあるせいもあってか、何か神聖な感じさえした。

帰って昼食。明日、三人を我が家であずかるので、昼食はチキンライスをと考えていたら、先を越された。明日のメニューを考え直さねばと思いながら、チキンライスを頬張り、カボチャのスープに口をつける。

翌日は、出勤前に娘が子どもたちを置きに来る。暖かい仏間に連れていき、まずは「のんのんちゃん」拝み。寛大と実歩が線香に火をつけ、宗矢が鐘をたたく。その後、寛大はブロック、実歩は私が描いた絵の色塗り、宗矢は型はめやはめ板を。

十時を過ぎると、バッタの公園に三人を連れていく。宗矢はあれだけ喜んでいた滑り台を怖がるようになっていた。怖さが分かるようになってきたのかな。

帰って昼食。作っておいた親子丼を三人とも喜んで食べた。昼食後、宗矢をトイレに連れていき、おしっこが出ると、すかさず宗矢が「おっかあ」と言う。上手にできたことをお母さんに伝えてくれということだろう。

宗矢を寝かせた後は、寛大、実歩とトランプにウノ。寛大が抜けてブロックをし始めると、夫が代わりに入る。おやつの後、また公園に行って帰ると、忠ちゃんが、筍を袋に一杯詰めて迎えに来た。明日は、子守はない代わりに、朝から筍の始末だ。

がらがら橋日記

宮森健次

本屋温泉

本が買う物から借りる物になって久しい。それ以前は買うのが大好きだった。読書よりも買書を趣味としていたそのころは、本屋でいくらでも時が過ごせた。一つ一つの棚をじっくりと平置きの表紙、背表紙を読みながら歩く。気になる本に出合うと手に取ってパラパラとめくり、手元に置きたいと思ったら迷わず買った。就職して給料をもらうようになったら拍車がかかった。ほとんどページをめくらないまま書棚に収まってしまう本もあったが、そんなことはどうでもよかった。

あるきっかけから本を手放すことをためらわなくなり、むしろ無い方がいいような気もしてきて、借りることを優先するようになった。図書館に足繁く通うようになると、代わりに本屋から足が遠のいた。たまに行ったとしても、費やす時間はほんのわずかになった。お目当ての本のところに直線で行く、あるいは検索用のタッチパネルのもとにまず赴き、本の在庫を調べて、なければさっさと店を出る。いつの間にか本屋は、時を気にせず過ごすところから用事を済ますところに変わった。ネットや電子書籍を見るようになったら拍車がかかった。

ぼくは、自分の身に起きたこの変化を特に気にもとめず、いいとも悪いとも考えないできた。時代が変わっていくのにうまく合わせているとさえ思っていたかもしれない。

先日、珍しい好天続きにふと思いついて、山歩きに出かけ、とある温泉旅館に泊まった。部屋の縁側には小ぶりなテーブルと揺り椅子が海と島を映す窓に向かって置かれている。その端には書棚と読書机があり、プレーヤーからはキース・ジャレットが流れていた。本は一畳ばかりの小部屋にも、和箪笥の引き出しの中にも様々に置かれていた。客室ばかりか館内至る所で堂々とだったり密かにだったりして本が待ち構えていた。売り本もあった。次々と現れる本を見たり手に取ったりしていると、館主とおしゃべりしているみたいで楽しかった。古今様々なジャンルの本が脈絡なく置かれているようでいて、建築、美術、食、言葉への強い関心が伝わってくる。好きなところで好きな格好で好きな照明で一冊また一冊と読む。何だか懐かしい感じがしてくる。昔は本といっぱい遊んでいた。

機械的に分類された図書館仕様の読書でいつの間にか頭が硬くなっていたようだ。人との付き合いがそうであるように、本との付き合いも分類なんて背景に消えかかっているぐらいでいい。もっと五感で味わうべし。ここの温泉の効能書きは見逃したが、もしなかったら一筆加えたい。読書に効きます。

30代フリーター　柄谷行人が去年出した新著についてこんなことを言っている。「『力と交換様式』は文芸批評。古今東西、いろんなものを読んで考えた。全ては文学といえば文学ですから」（1月1日朝日新聞デジタル）

年金生活者　吉本隆明が「言語にとって美とはなにか」も「心的現象論」も「共同幻想論」も文芸批評として位置づけていたことを思い出させる。ふたりは長く対立し続けたが、思想的には最も近いかもしれない。

　柄谷は「力と交換様式」で、交換によって生まれる霊的な力の重要性を強調している。その力が人を駆り立て、社会を動かす、と。彼によれば、交換はA（互酬＝贈与と返礼）、B（服従と保護＝略取と再分配）、C（商品交換＝貨幣と商品）、D（Aの高次元での回復）の各様式に分かれる。それぞれの時代に支配的な様式はA、B、Cの順に推移し、Dはいまだかつて支配的になったことはない。霊的な力はそれぞれの様式に応じて異なったあらわれ方をする。

　歴史の考察に「霊的な力」という宗教的な概念を導入するのは非科学的、非論理的に見える。しかし、なんと名づけようと、物理的な力とは明らかに異なる力が交換において発現しているのは否定しようがない。カネに振り回される人間と社会の姿がそれを示している。

30代　柄谷はその力の解明に向かった。

年金　それを実行するには、たとえば商品を物質としてのみ、貨幣を交換や蓄財の手段としてのみ扱うことによっては不可能だ。言い換えれば対象をフィジカルな力だけを持つもの、人間をそれのみに左右される存在として扱うことによっては不可能だということだ。

　文学は木の葉のそよぎひとつに人間を動かす力を見ることができる。それは風の物理的な力とも、植物の生物としての力とも、樹木の持つ経済的な力とも異なる。それはフィジカルな存在が人間と交わるとき、そこに生じる精神的な力、「霊的な力」にほかならない。物理学も、生物学も、経済学もそれを描いたり、分析したりすることはできないが、文学はそれを描くことができるし、文芸批評はそれを解き明かすことができる。

30代　吉本隆明のほうはどうなんだ。

年金　吉本は正岡子規の次の句を「優れた芸術作品」として紹介している（「言語論要綱」、『SIGHT』2006年夏号）。「鶏頭の十四五本もありぬべし」。「鶏頭」を植物としてだけ、「十四五本も」を数としてだけ、「ありぬべし」を「あるだろうな」という意味としてだけ受け取れば、こんな句のどこがいいんだということになる。だが、吉本は「『ありぬべし』という主観性に至る表現」によって、読者は「作者子規はどんな内心の思いをこめていたのだろうかと、さまざまな想像を刺激される」と指摘する。そこに働いているのはフィジカルな力とは異なる「霊的な力」だ。

30代　長年の対立がむしろふたりを近づけたのかもしれない。

年金　両者の共通点のひとつに、西洋思想の伝統である心身二元論、霊肉二元論を超えようとする発想がある。ふたりがともに批判している史的唯物論は社会を土台と上部構造に分ける心身二元論の一種だ。

　柄谷は社会の土台を生産様式でなく交換様式として見ることによって二元論を克服しようとしている。生産様式は上部構造を決めはするものの、次元が異なるので、間接的にしかできない。これに対し、交換はそれ自体が霊的な力であり、その力は上部構造に分類されてきたもののひとつだ。

　吉本の二元論克服の試みは「心的現象論」で顕著だ。「まず、生命体（生物）は、それが高等であれ原生的であれ、ただ生命体であるという存在自体によって無機的自然にたいしてひとつの異和をなしている」として、それを「原生的疎外」と呼んだ。同じことを「生命体が、生命体という存在であるということ自体から、いいかえれば存在するということ自体によって存在が影響されるという心的な現象」とも言っている。

30代　ふたりは一元論を目指しているのか。

年金　そう言えると同時に、その思考はどちらも「三元論」として展開されている。吉本の「三元」は対幻想、共同幻想、個人幻想であり、柄谷の場合は交換様式のA、B、Cがそれに当たる。

　吉本の幻想論を画期的なものにしているのは対幻想という概念を導入したことだと指摘したのは三浦雅士だ。集団と個人、共同性と個といった二元論的な考えは昔からあった。その意味では共同幻想と個人幻想という概念は目新しいものではない。吉本の独創性はそのどちらにも属さない性の領域を「対」の世界と考え、それと他のふたつの領域を結びつける構造を明らかにしたことにある。

　柄谷の場合はこの第3の領域に相当するものとして交換様式A（互酬＝贈与と返礼）が考えられている。「互酬」「贈与と返礼」という言葉から直感できるように、それは「対」を前提にしている。これに対し、主として国家に担われる交換様式B（服従と保護＝略取と再分配）は「共同」なしには成り立たない。そしてC（商品交換＝貨幣と商品）はその担い手として自由な市場における「個人」を想定している。

ニュース日記　861

中村　礼治

柄谷行人と吉本隆明